

Title	現代日本社会の「ハーフ」をめぐるライフストーリー分析：コンネルの制度論による家族・学校・職場・街頭に関する考察
Author(s)	田口, ローレンス吉孝
Citation	一橋社会科学, 8: 57-66
Issue Date	2016-12-26
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/28248
Right	

[研究ノート]

現代日本社会の「ハーフ」をめぐるライフストーリー分析 ——コンネルの制度論による家族・学校・職場・街頭に関する考察——

田口 ローレンス吉孝

1. 問題意識

「ハーフ」「ダブル」「ミックス」そして、かつては「混血児」などと呼ばれた人々について、かれらが直面する差別的体験や日常生活で投げかけられるステレオタイプの実態とその帰結、それらに対する当事者の抵抗や対応のあり方について従前の社会学の領域では十分に研究が蓄積されてこなかった。その一方で、特に1990年代後半から徐々に社会運動や教育問題に着目する研究⁽¹⁾が、2000年代後半からは歴史的な問題関心から特に表象（語句・メディア・映画・漫画など）に着目する研究が蓄積されてきた（加納2007；岡村2013；岩渕編2014；竹沢・川島編2016など）。また特に近年では社会学的な分析の中にも当事者へのインタビューデータを用い、「ハーフ」言説に対する当事者の交渉やアイデンティティの複雑なあり方について論じる研究が増えつつある（三浦2015；小ヶ谷2016など）。しかしながら、ここではインタビュー対象者の年齢層が若年層であり（10代～20代）、語りの分析がアイデンティティや家庭での経験、教育・学校生活などに集中している。

そこで本研究ノートは「ハーフ」と呼ばれる人々⁽²⁾について幅広い年齢層（20代～50代）の成人世代の語りに着目し、家庭や学校のみならず様々な社会的場面での経験を明らかにする小論としたい。

2. 制度への着目

本研究では、「ハーフ」と呼ばれる人々が経験する多様な社会的場面の構造に着目するため、コンネルの「制度」に関する議論を参照する。コンネルは既存のジェンダー理論において研究の焦点が「全体社会のレベル」か「個人間関係」に当たる傾向が強かったことを指摘し、これまで省略されがちだった「個人と社会を媒介する社会組織のレベル」の分析の重要性について以下のように述べている。

この社会組織のレベルを理解することが最も重要である場合も多い。（中略）男女間の政治関係にかかわる日常生活は、そのほとんどが、企業の雇用差別や学校の非性別的カリキュラムなど、要するに制度にもとづいている（Connell 1987=1993：187）。

コンネルの制度論において特徴的なのは、既存の研究で対象とされてきた「家庭」や「職場」といった制度のみならず、「バスの待ちの列」や「街頭」などといった社会的場面をも包含する

点である。コンネルはこの枠組みによって種々の制度の構造がいかにジェンダー化されているかを論じているが、これらの制度は同時にエスニシティや人種、階級、年齢、セクシュアリティなどによっても構造化されている。

そこで本研究ノートの目的は、「ハーフ」と呼ばれる人々について、①成人でありかつ幅広い年齢層（20代～50代）の対象者の語りに着目し、「学校」や「家族」のみならず、「職場」や「街頭」といった様々な制度での経験を明らかにする。②そして、語りの分析からこれらの制度が当事者をめぐって、いかに人種・ジェンダー・階級などの要素によって構造化されているのか、③それが当事者にとってどのような帰結をもたらしているのかを明らかにする。

3. インタビュー調査概要

生活史の分析では、筆者が2012年10月から2016年3月までに実施したSNSを介した当事者コミュニティへのフィールド調査や、知人からの機縁法によって得られた12名の協力者からのインタビューデータを用いる（表1）。インタビューは一人に対し1、2時間程度おこない、協力者の経験に即して様々な社会的場面に関する語りに着目する半構造化インタビューの方式をとった⁽³⁾。

表1 インタビュー協力者一覧

	名前（仮名）	性別	年齢層	ルーツの国	出生地
1	木村 太一	男性	20代	父親がバングラデシュとサウジアラビア	東京
2	原 聡	男性	50代	父親がアメリカ	神奈川
3	長谷川 大輔	男性	20代	母親が韓国	東京
4	浅井 かよ	女性	20代	父親がアメリカ	神奈川
5	パーカー ライアン	男性	20代	父親がアメリカ	神奈川
6	山本 りな	女性	30代	母親がバングラデシュ	東京
7	田中 トーマス	男性	30代	母親がガーナ	東京
8	ミラー イーサン 関	男性	20代	父親がアメリカ	福岡
9	ネルソン ルイス 亨	男性	20代	父親がガーナ	東京
10	岸辺 ナディア瑞江	女性	20代	父親がドミニカ共和国	東京
11	長田 隆史	男性	50代	父親がアメリカ	神奈川
12	デミレル 知絵	女性	20代	父親がトルコ	東京

このように本研究では多様なルーツの人々の経験について論じる。岡村（2016）はこれまで蓄積されてきた多くの「混血児」「ハーフ」「国際児」に関する研究を緻密に整理した上で、これらの研究が類似の関心を持つものの、語句の使用の差異によって研究の問題関心が異なり、これらが連続した主題としてあつかわれてこなかった点を指摘している（岡村2016：56）。本論でも岡村と同様の問題意識を引き継ぎ、特定のルーツによった対象の経験ではなく、上記表1のように多様なルーツでありつつも、ある種の共通のテーマとして語りから抽出された「家族」「学校」「職場」「街頭」という四つの制度に着目する。

4. 家族

本研究のインタビュー協力者の語りのほとんどすべてで聞かれたのが家族にまつわるストー

リーであった。Connellは家族について、「家族ほど長期にわたり持続的で、集約的な接触にもとづき、経済・情緒・権力・抵抗を織り込んだ、濃密な関係からなる制度は他には存在しない」と述べている（Connell 1987=1993：190）。「ハーフ」と呼ばれる人々の家族をめぐる語りにおいても、家族内部の多層的な関係性における情緒的つながりや葛藤・抵抗といったストーリーが語られていた。ここでは特に、①周囲からの眼差し、②家族内部での葛藤という二点を取り上げたい。

①周囲からの眼差し

太一：（母親と）似てなさ過ぎて、逆に目立つ。一緒にいると親子に見られないから。母親は完全な日本人で、おれは外見が外国人だから。

原：市役所行って、「この人（母親）の住所教えてくれ」って言ったら、「どういう関係だ」つつうんだよ。だから、（母親と息子が）色違いでいると思ってないじゃん、向こうだって。だから「どういう関係だ」って。「おれは息子だ」つつって。最初信用しなくてさ、しょうがない、免許証だしてさ、戸籍謄本出してさ、「確かに、名前一致するでしょ、おれが聡ですから」って。

日本社会におけるヘゲモニックな家族像はその構成員がすべて「日本人である」というイメージであり、ドラマや街角の広告などでもそれらの家族像は氾濫している。このような日本人家族イメージのため、たとえ血縁関係にあったとしても外見の違いによって周囲の人々から「親子に見られない」という状況が生じる。これは単に日本人家族像の表象やアイデンティティの問題にとどまるものではなく、原さんのケースのように、市役所窓口の事務手続などにおいても具体的な問題を引き起こす場合がある。ミックス・レイスの家族について分析したソンは、「ミックスの家族は、一つの人種・一つのエスニシティ・一つの宗教のみを優位化する圧力にさらされる」（Song 2010：268）と述べているが、本論でも人種化された日本人家族像（全員が日本人で、日本語を話し、日本の習慣を持つ）に基づく周囲からの眼差しにさらされていた。

②家族内部での葛藤

太一：母親も日本人だし、おじいちゃんおばあちゃんも日本人じゃん。で、（4人で一緒に）暮らしてるけど、やっぱケンカとかすると、すごい言われるよ。（…）母親とケンカすると、「父親に似てきた」とか、言われるし。おじいちゃんおばあちゃんも、あの一、父親がイスラム教だからさ、「イスラムは怒ると何するか分かんない」とかさ、ケンカとかしてる時に、「すぐキレル」だとかさ。あ、「血は争えない」だとかさ、かなり言われるよ。（…）「だからすぐテロが起きるんだよ」って。

大輔：韓国で驚いたのが、久しぶりに実家帰って、親戚一同が集まってたんですよ。で、親戚の一人が、なんか英語で字が書いてあるシャツを着てたんですよ。で、「なんて書いてあるの？」って聞いたら、「竹島は韓国のものだ」っていうTシャツを着てたんですよ。で、僕久しぶりに会って、「えっ？」てなって。（…）「ちょっと、きつすぎない？」って。

ソンは「複数のエスニック・人種集団につながりがある家族の内部では、子どものアイデンティティの社会化は交渉と軋轢の領域となる」(Song 2010:267)と述べているが、太一のストーリーでは家族内でのケンカの際に父親に結びつけられた人種差別やイスラム教に対する偏見が本人にも結びつけられてしまい、大輔の語りでは親族の集まりという親密圏に日韓の歴史問題やナショナリズムが埋め込まれていた。

さらに「ハーフ」であることに対する周囲からの偏見や、親に対する軋轢から困難を経験してきた浅井かよは、以下のような心境を語っている。

かよ：母親に反抗期っていうのもあって、ハーフっていうのもあったし、親が離婚してるっていうのもあったし、「なんでこんな思いしなきゃいけないの」と思って…。待って、泣きそうになってきた。大丈夫。そう、お母さんに一回、「もっとふつうの家庭に生まれたかった」って言っちゃって。それでね、言ってすぐ後悔した。マジで謝ろうと思ってる、本当に。

このように、かよが「もっとふつうの家庭に生まれたかった」と母親に語ってしまうというストーリーからは、親密圏での葛藤の痛切さが伝わってくる。また、ひとつの家族内の葛藤だけではなく、恋愛・結婚などのような親密圏の再生産の場面においても人種的な差別を経験しているケースが聞かれた。このように家族という制度に着目した場合、人種化された日本人家族像からの排除や、家族内部での人種・宗教・エスニシティ・ナショナリズムなどによる軋轢の経験が明らかとなった。

5. 学校

学校について分析を行ったConnellは、ほとんどどの学校でも活発な「ジェンダーの政治性」を見出したという(Connell 1987=1993:188-189)。このようなジェンダー編成と同時に、日本の学校では、特に義務教育期間において「日本人らしさ」と集団への同化がもためられる(これらは例えば、日本語での授業・教科書、校歌、制服、体育着、お弁当、ランドセル、算数セットやピアノといった教材にいたるまで細部に及ぶ)。本節では語られたライフストーリーの中からとりわけ学校制度の同化の力学が強くはたらいていた小学校での語りに着目する。

ライアン：先輩から仲間はずれにされて。(…)小学校の時が一番きつかった。

太一：(…)いじめられたのも小学校の時だし。とりあえず、おれ肌が黒かったから、(他の生徒とは)逆に。で、みんなは普通の色じゃん。一人だけ黒かったから、とりあえず外国人扱いされて。当時は学校にミックスなんて一人いるかいないかぐらいだったから。低学年の頃はそんな感じで(…)結構空気読むとかさ。まわりと違うの嫌がるとかさ。で、だんだんそういうのが出てきて、おれは普通にしても、と思っても、周りとはなんか違ってみたいで。それでいじめられてたね。

りな：小学校とかに入ると周りとは違うっていうのがなんかすごいコンプレックスになっちゃって、わりとそういうこと（親の言語や文化）を排除しようとしちゃって、自分が。だから（母親が）ベンガル語教えようとしても拒否しちゃったの。（…）完全ないじめとかはなかったよ。（…）でも、そんなに仲良くない子って偏見が入ってくるから、例えば、（肌の）色が黒いのとかよく言われたし。あと、みんなよりちょっと毛深いとか。なんかそういうのでからかわれたかな。（…）3、4年の女の子とかが二人ぐらいで近づいてきて、「あいのこなんでしょ？」とか。（…）そういうのが子どもながらに傷ついて、なるべくみんなと同じようにしようと、必死に空気を読んで。みんなと違うと思われないように。変に悟られないように。私は全く日本人ですみたいなスタンスで、常に振る舞うようにしてたから、やっぱりベンガル語とかも拒否しちゃったし。

フィリピンのルーツをもつ「ダブル」の青年に聞き取り調査を行った小ヶ谷は、学校において「ルーツ」が意識される場面は、クラスメイト、クラスメイトの親、外国人の親、教師という複数の相互関係の中で浮かび上がっている状況を指摘した（小ヶ谷2016：9）。本研究の調査協力者の語りでも、いじめや葛藤はこれらの相互関係のなかで経験されていた。また、りなは「色が黒い」や「毛深い」といった身体的特徴に対する「からかい」を受けているが、ここには同世代の女子生徒の身体との差異が強調されるという、人種とジェンダーの交差がみられる。さらに、3人のストーリーで共通している点は、外見的特徴で起こるいじめの問題だけではなく、小学校において求められる「日本人らしさ」の規範や周囲からの同化圧力の問題である。このような経験の蓄積は当人のアイデンティティ構築や友達関係といった友好関係の形成において影響を与えるばかりではなく、例えば桐生市のいじめによる自殺のケースなどのように痛ましい事件も起きているため過小評価はできないだろう。このような学校における同化と日本人化の作用が「ハーフ」や外国のルーツを持つ児童にあたえる精神的負担についてさらに議論を深めていく必要がある。

6. 職場

これまで社会学領域では、「被差別部落」出身の人々や「在日コリアン」をめぐる就職差別の研究が蓄積されてきたが、本節では「ハーフ」と呼ばれる人々に関する就職差別や労働市場における差別の実態を明らかにしていく。インタビューでは自らの外見や語学的能力を活かすことで雇用機会を得るという事例も見られたが、その一方で、当事者に対する人種的なステレオタイプが労働市場への参入障壁となるケースや、職場での偏見に晒される事例が明らかとなった。そこで本節では特に①面接と②職場という二つの場面に着目する。

①面接

労働市場へ参入する際の面接という場面では、面接官の持つ人種・エスニックなステレオタイプが雇用機会の獲得に対して強く反映していた。

トーマス：（バイトの面接で）警備員（の仕事）は全部、受からなかった。（面接官の人から）「黒

人なんで無理です」って。「黒人のガードマンは雇えないでしょ」って。「ほんと申し訳ないですけど、こればかりは無理です」って言われて。で、普通に。

* : どういう意味なんだろう…。

トーマス：ようするに「ガードマンが黒人っていうのは企業のイメージが悪くなる」って（面接官が）思っていて、「なんで外国人雇ってんだらうってなるからダメです」って言われて。

「黒人」「外国人」を雇うことで「企業のイメージが悪くなる」という理由が企業側から拒否の理由として語られている。このように人種に基づく偏見は、本人に精神的苦痛を与えるだけではなく、収入を得るための労働機会から排除するという実質的な効果をもっていることがわかる。面接の事例では他に、差別を受ける可能性を考慮して「韓国」のルーツを明かさないとというケース（大輔の例）や、電話面接の際にカタカナ名や外国のルーツを想起させる名前によってそもそも対面面接の前段階で拒否されてしまうケースも語られている（イーサンの例）。

②職場

つぎに職場という制度での経験に着目する。

亨：巡回するマネージャーからも、「ネルソンって英語喋れるの？」って毎回聞かれる。（お店の）フロアに出てる時も、（お客様から）「きみ、どこから来たの？」って毎回聞かれる。それプラス、「きみ日本語上手だね」っていうのが。（…）1日に一組は絶対に聞かれる。（…）「ハーフ？」って聞いてくる人は少ないかな、やっぱ、もろ外国人って思われてる。やっぱ、顔が日本人じゃないから。

ナディア：会社の上司とかには、「岸辺さんはやっぱり、外国の血が入ってるからちょっと違うよね」とか。「要するに大雑把。やっぱり外国の血が入ってるからだよね」って。

隆史：（仕事中に「外国人」と聞かれる経験が）「〇〇電気でーす」って入ってくるんだけど。で、「ハーフ？」って聞いてくれる人はまだいい、「どこの人？」とかもある。（…）外国人嫌いな人っているからね。「なんであんなのが来た！？」ってクレームになる時もあるんだよ。（…）「日本人です」って言っても、もう駄目だからね。

亨と隆史さんのストーリーでは、職業（それぞれ寿司屋と電気技師）の客と接する場面で「外国人」とみなされるというストーリーが語られた。また、新聞記者をするナディアも取材の際に偏見を経験しており、さらに上司からも「外国の血が入ってる」という意味づけによって仕事が「大雑把」だと言われてしまう。とくに、隆史さんの電気技師としての業務形態は住宅訪問による電化製品の修理・取付けであるが、その際に人種差別的対応をとられるだけでなく、業務を行えないばかりか「外見」がクレームに至ってしまうという強い作用も語られた。

このように職場という制度に着目した時、当事者への「ハーフ」や「外国人」という意味づけは、単なるシンボリックなイメージの投影なのではなく、雇用機会からの排除や顧客からのクレームといった具体的な効果をもたらしている状況が明らかとなった。

7. 街頭

「ハーフ」の人々が日常生活において受ける様々な眼差しは、学校や職場などのような固定的な場所をもつ制度だけではなく、道路を歩行している時、電車・バスに乗車している時、買い物をしている時など様々な空間において経験される。その中でも特に本節では、不特定多数の歩行者が行き交う「街頭」という制度に着目する。Connellは「街頭」について、これが「制度」と捉えられることはあまりないが実際には構造的なジェンダーパターンが多く見られるため、「街頭は少なくとも、特定の社会関係を持つある明確な社会環境なのである」と述べている（Connell 1987=1993：203）。「ハーフ」と呼ばれる人々の経験に着目した場合にも、街頭という制度に関して多くのストーリーが語られていた。

デミレル：(中学校の)帰りに、家まで歩いてて、いろんな人が私の顔を見てくるのがすごい嫌だった。なんでこんな私の顔見るんだろう、みたいな感じで。今思えば、フンとか思うけど、そんなときすごい繊細だったからやっぱり。なんでそんな私の顔見るんだろう、とか。

トーマス：(仕事で疲労し路肩で休憩をしていた際、通りすがりの男性に)目を挙げたときに、目の合い方が悪くて、やべえなと思って、つかかってくるなと思ってすぐ下向いたら、「おいおまえ」って。来ちゃったなと思って「あ、はい」って言ったら、「お前ちゃんと労働ビザ持ってやってんのか」って言われて。「お前俺がここに警察連れてきたら一発で国に返されるよな」って言われて。(…)ようするにみんなにとっては、ビザなしの不法労働者なわけよ。だめだなこりゃと思って。(…)ずっと、「すみません」って謝って。そこで「いや、日本人です」って言ってもさらに逆上するだけだなと思って。

Connellが説明するように「街頭」において女性は周囲の目線に過度にさらされるが、イランのルーツを持ちかつ女性であるデミレルは、このような「街頭」における人種・ジェンダーの交差する眼差しについて嫌悪感を示していた。また、トーマスさんは通りすがりの他者から「ビザなしの不法労働者」と眼差された経験を語っている。このように不特定多数の他者が行き交う街頭では「ハーフ」に対する人種・ジェンダーの交差する偏見や眼差しにさらされる状況がわかる。

また、街頭におけるさらに深刻な事例として、特に国家の権力装置とも呼ばれる警察の「職務質問」に関するストーリーが語られた。

原：人がいっぱいいる中で、おまわりさんがバツと来て。「ちょっといいですか？」って、おれの袖ひっぱるわけ。(…)こっちはさ、こんだけいっぱい歩いてる中でさ、顔の色がちょっと違うだけでね、おれを止めたってわかってるからさ、そういうのさ。「なんでおれを止めたんだ、なんの理由があって止めたんだ？」って。(…)だからね、もうほんと普通の日本人の顔で生まれたかったなって思ったことは何度もあるよ。もうさすがにこの歳になるとないけど、30代ぐらいの頃はね。普通の日本人の顔で生まれてきたら、こんな職質されることもないし。どこ行っても、いきなり普通に話ができるし。

亨：おれもよく昼間とかで、警察に止められたりして、「きみ、(外国人)登録証見せなさい」っていわれて、「は？」と思ってさ、おれちょっとキレてさ、「そんなの知らない」と思ってさ。「日本人ですよ」みたいな感じで言ったんだけど、「いやいや登録証がないとだめだよ」って。「しつこいな」と思って。で、ちょうどその時、母親が偶然そこ通って、「かれ日本人なんで、登録証必要ありません」って説明したら、一発で納得してくれてさ。おれが言った時は全く納得してくれなかった。だからそういうのには本当に困った。

太一：威圧的に来るじゃん警察って。(…)で、もう、顔で判断されるから、よく止められるし、「あぶないもの持ってない？」とか。ボディチェックとか荷物検査とかしょっちゅうされるし。(…)「どこの国の人ですか?」、「日本人です」って。「ID見せてもらっていいですか?」って。「免許証、身分証明書見せてもらっていいですか?」って。で、免許証見せて、免許証ないときは学生証見せたりとかして。で、「ちょっと持ち物検査してもいいですか?」って。(…)「危ないもの持ってないですね、ナイフとか持ってたら困るからさ」って。ふつーに言われるよ。

トーマス：例えば小学校のときに、5、6人ぐらいで自転車乗っててさ、警察がおれのことだけ止めたわけ。そう6人ぐらいでチャリンコ乗ってて俺だけ止められて、(他の友達に警官が)「君たち先に行っていていいよ」って。「どうしたんすか、おまわりさん」って言ったら、「それ君の自転車?」って言われて。「証明しなさい」って言われたりとか。

アメリカの「ミックス・レイス」に対する職務質問の事例を取り上げたギルバートは「ミックス・レイスに対する警察のプロファイリングは、警官の持つジェンダー・人種、そしておそらく経済的地位に起因するステレオタイプが影響している」と説明している(Gilbert 2005: 70)。建前上は「任意」である警察による「ハーフ」への身元確認は、公務執行妨害を盾にほぼ拒否することができず強制的に施行される。また、単に身元確認だけではなく、手荷物検査や一時的な拘留までに至るケースが聞かれた。警察による職務質問は、「周囲の傍観者からの屈辱的な目線を防ぐことができない状況に立たされる」(Bou-habib 2011: 43)ため、当事者の精神的苦痛は大きいものとなる。さらにトーマスさんは小学生の頃から職務質問を受け、原さんは未成年から壮年期という現在に至るまでライフコースの成長過程で多くの職務質問を経験してきた。そして、メディアや映画における「ハーフ」言説を分析した山本は、その「黒い肌」と男性性に対して犯罪化や暴力性という枠づけが結びつけられる状況を論じているが(山本2014: 139)、本研究でも同様の人種化・ジェンダー化された傾向が見られた(職務質問を受けた人のほとんどが男性であった)。

8. 結語と今後の課題

本論ではコンネルの制度概念を議論の導きの糸とし、「ハーフ」と呼ばれる人々をめぐる家族、学校、職場、街頭という四つの制度に着目することで、これらの制度がいかに人種・ジェンダー・エスニシティ・宗教などの要素の交差によって構造化されているかを明らかにすることができた。

また、偏見や差別が単にシンボリックなものとしてではなく、親密圏内部の葛藤、学校における周囲との同化やルーツの否定、就職差別や業務でのクレーム、街頭における人種差別的な職務質問など具体的かつ深刻な帰結をもたらしていた。

ここでは小論として、「ハーフ」と呼ばれる人々の生活史におけるある種の共通の語りのテーマとして四つの制度を取り上げたが、竹沢(2016)が述べるように、当事者をめぐる歴史的背景の差異や、人種・ジェンダー・階級・エスニシティ・国籍・名前・出身地・地域性・時代背景などの要素によってその経験やアイデンティティ、対応のあり方も多様で複雑なものとなる。また、コンネルの分析枠組みも単に制度を示したのではなく、これらの制度において機能するジェンダー^{レジーム}体制についてその相互関係と変化の側面を概念化している。今後は、このような経験の複雑性や差異、さらに制度において作動するジェンダー・人種・階級的な体制の相互連関などについても分析していく。さらに、本論で十分に示すことができなかったエージェンシーの側面、すなわち当事者が人種化された社会構造をいかに再生産もしくは攪乱しているのかについても別稿で論じたい。

文献目録

- Bou-habib, Paul, 2011, "Racial Profiling and Background Injustice", *The Journal of Ethics*, 15:33-46.
- Connell, R.W., 1987, *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics*, UK: Polity Press. (=1993, 森重雄・菊池栄治・加藤隆雄・越智康詞訳『ジェンダーと権力—セクシュアリティの社会学』三交社.)
- Gilbert, David, 2005, "Interrogating Mixed-Race: A Crisis of Ambiguity?", *Social Identities*, Routledge, 11(1) : 55-74.
- Song, Miri, 2010, "Does 'race' matter? A study of 'Mixed race' siblings' identifications", *The Sociological Review*, Blackwell Publishing Inc., 58(2) : 265-285.
- 岩淵功一編, 2014, 『<ハーフ>とは誰か 人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社.
- 岡村兵衛, 2013, 「『混血』をめぐる言説: 近代日本語辞書に現れるその同義語を中心に」神戸大学国際文化学研究科『国際文化学』26 : 23-47.
- , 2016, 「『ハーフ』をめぐる言説—研究者や支援者の著述を中心に」竹沢泰子・川島浩平編『人種神話を解体する3 「血」の政治学を超えて』東京大学出版会.
- 小ヶ谷千穂, 2016, 「日比ダブルの若者が語る家族とアイデンティティ—日本育ちの若者の語りから(1)」『フェリス女学院大学文学部紀要』51 : 1-27.
- 加納実紀代, 2007, 「『混血児』問題と単一民族神話の生成」恵泉女学園大学平和文化研究所編『占領と性』インパクト出版会.
- 川端浩平, 2014, 「<ダブル>がイシュー化する境界域—異なるルーツが交錯する在日コリアンの語りから」岩淵功一編『<ハーフ>とは誰か 人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社.
- 竹沢泰子, 2016, 「混血神話の解体と自分らしく生きる権利」竹沢泰子・川島浩平編『人種神話を解体する3 「血」の政治学を超えて』東京大学出版会.
- 竹沢泰子・川島浩平編, 2016, 『人種神話を解体する3 「血」の政治学を超えて』東京大学出版会.
- 野入直美, 2009, 「沖縄のアメラジアン—教育保障運動が示唆していること」志水宏吉編『日本の教育と社会 第17巻 エスニシティと教育』日本図書センター.
- 三浦綾希子, 2015, 『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ 二世世代のエスニックアイデンティティ』勁

草書房.

李洪章, 2008, 「肯定性を生きる戦略としての『語り』と『対話』—在日朝鮮人=日本人間『ダブル』のライフ・ストーリーを事例として—」『京都社会学年報』16: 75-96.

山本敦久, 2014, 「<ハーフ>の身体表象における男性性と人種化のポリティクス」岩淵功一編『<ハーフ>とは誰か 人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社.

注

- (1) 「アメラジアン」に関する研究（野入2009）、在日コリアンにおける「ダブル」の研究（李2008）、「日比国際児」の研究（三浦2015）など。
- (2) 「ハーフ」と呼ばれる人々は、親のルーツや家族構成、言語、文化、慣習的行為、出生地、性別、セクシュアリティ、外見的特徴、年齢などによって個々に多様な経験をしており、これらを単一のエスニックグループであるかのように扱うことはできない。本研究の目的は、「ハーフ」と呼ばれる人々の経験の一般的な傾向を明らかにするのではなく、あくまでも、かれらの語りを通して日本社会の「制度」がいかに人種・ジェンダー・階級などの要素によって構造化されているかを明らかにすることである。
- (3) インタビュートランスクリプトの記述の凡例：インタビュースクリプトのフォントは全て太字である。筆者は「*」。「(…)」は中略を意味している。また、プライバシー保護の観点から、協力者の名前は仮名とし、関わる組織や会社名については「○○」と記号で置き換える。

[査読を含む審査を経て、2016年11月25日掲載決定]

(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)